

【暗唱聖句】「それならば、どうしてわたしが、この大いなる都ニネベを惜しまずにいられるだろうか。そこには、十二万人以上の右も左もわきまえぬ人間と、無数の家畜がいるのだから。」ヨナ 4:11

【今週のポイント】

【日曜日・逃れて】

魚の腹の中に飲み込まれた預言者として有名なヨナは、紀元前8世紀ころ預言者として活躍した人物です。列王記下14:25に、「イスラエルの神、主が、ガト・ヘフェル出身のその僕、預言者、アミタイの子ヨナを通して告げられた言葉のとおり、彼はレボ・ハマトからアラバの海までイスラエルの領域を回復した」との言葉から分かるように、ヨナは預言者として、様々な神様の言葉を取り次いできました。しかし神様から、アッシリアの首都ニネベにいて、悪を悔い改めるようにと伝えよと言われたとき、怖くなり、主から逃れようとタルシシュ舟で向かうのです。当時のアッシリアは残忍さで知られていました。新生アッシリアの王センナケリブは、勢力を広げ、ユダにも進行し、たくさんの人が殺されたり、奴隷とされたりしました。そのような残忍な敵国の人々を助けるために預言せよと言われたわけです。ヨナが恐ろしくなり、逃げようとしたのも無理はありません。そもそも、なぜニネベの人々を助けなければならないのでしょうか。命を犠牲にしてまで預言しなければならないのでしょうか。しかし、イエス様が十字架にかかられたのも、まさにこのような状況においてだったのです。

ヨナは怖くなり、平和を求めて舟に乗り込みましたが、その舟は嵐に巻き込まれてもっと大変な事態に陥ってしまうのです。ヨナは神様に従うことで平和な生活が脅かされると考えましたが、皮肉なことに、主から逃げることでもっと大変な状況に陥ることになるのです。私たちは神様から離れては、平和を見出すことなどできないのです。

【月曜日・3日間の休み】

どれだけ神様から逃げて、大きな困難の中で神様なしには生きられないことを改めて悟られるものです。ヨナは嵐の原因が自分にあることを悟り、海の中に自ら、ほおりこまれます。波に飲み込まれて死んでしまってもおかしくはありませんでしたが、神様が巨大な魚を送ってヨナを救います。しかし、すぐに海の中から救いだされるのではなく、イエス様が黄泉に3日間くださったように、ヨナも3日間魚の腹の中ですごします。そして、真っ暗な魚の腹の中でヨナは神様に祈るのです。

ヨナ 2:1, 2 「さて、主は巨大な魚に命じて、ヨナを呑み込ませられた。ヨナは三日三晩魚の腹の中にいた。ヨナは魚の腹の中から自分の神、主に祈りをささげ(た)」

聖書の中で3日間というのは、神様が困難の中で、私たちにじっくりと考えさせ、祈らせるためにしばしば用いられる時間です。その深い瞑想と祈りの中で、人は神様と出会うのです。真の平安です。ヨナはその経験を聖なる神殿に達したと表現しました。

「…わが神、主よ、あなたは命を、滅びの穴から引き上げてくださった。息絶えようとするとき、わたしは主の御名を唱えた。わたしの祈りがあなたに届き、聖なる神殿に達した」ヨナ 2:8, 9

イエス様が3日目に墓から復活されたように、腹の中から出てきたときヨナは新しい人に生まれ変わっていました。

【火曜日・達成された使命】

ヨナ 3:3, 4 「ヨナは主の命令どおり、直ちにニネベに行った。ニネベは非常に大きな都で、一回りするのに三日かかった。ヨナはまず都に入り、一日分の距離を歩きながら叫び、そして言った。「あと四十日すれば、ニネベの都は滅びる。」

ヨナは魚の腹の中で回心し、生まれ変わりました。そして、主が言われたとおり、ニネベの街に行き、「あと四十日すれば、ニネベの都は滅びる」と叫びながら歩いたのでした。すると、「ニネベの人々は神様を信じ、断食を呼びかけ、身分の高い者も低い者も身に粗布をまとって」悔い改めたのです。さらに、このことがニネベの王様に伝えられると、

王様は王座から立ち上がって、王衣を脱ぎ捨て、粗布をまとして灰の上に座し、ニネベの人々に断食して悔いら貯めて、神様に赦しを請い、悪を離れるように告げたのです。驚くべきリバイバルが起こったのです。これは聖霊が働いたとしか思えません。聖霊が働くとき、街中に驚くべき回心が起こるのです。ヨナがしたことと言えば、町の中を叫びながら歩いてだけです。祈りの歩行がなぜ有効なのかは、このような事例を見るとわかることでしょう。エリコの街が陥落したのも同様でした。

【水曜日・怒りと不満に満ちた宣教師】

ニネベの人たちが悔い改めたので、神様は「思い直され、災いをくださのをやめられ」ます。このことは本来喜ぶべきことなのに、ヨナにとっては大いに不満であり、彼は怒るのです。ニネベの人たちに悔い改めてほしくなかったのでしょうか。彼らに滅びて欲しかったのでしょうか。町はいつもと変わらず平穏でした。これではまるで、自分の預言は間違っていたと取られかねません。偽預言者と後ろ指を指されかねません。このことがヨナは嫌だったようです。ヨナは砕かれる必要がありました。神様から逃げて嵐に巻き込まれ、魚の腹の中に飲み込まれたとき、ヨナは神様に祈りました。しかし、まだ足りなかった。このヨナの物語というのは、ニネベの街を通して成長させられるヨナの物語なのです。ある意味、そのためにニネベが用いられたのです。ヨナは神様が人間をどれほど愛しておられるのか、知る必要があったのです。神様の愛を知らずして神様の働きはできないからです。

イエス様がサマリアの人々から歓迎されなかったことがありました。そのときヤコブとヨハネは、「主よ、お望みなら、天から火を降らせて、彼らを焼き滅ぼしましょうか」と言います。すると、イエス様は振り向いて二人を戒められます。神様はクリスチャンだけでなく、すべての人を愛しておられ、すべての人が悔い改めて主の元に立ち返るのを待っておられるのです。

【木曜日・互惠関係】

ユダ 1:21 「神の愛によって自分を守り、永遠の命へ導いてくださる、わたしたちの主イエス・キリストの憐れみを待ち望みなさい」

ヨナはニネベの人たちのことを神様の愛で見たり、考えたりすることはなかったのかもしれませんが。しかし、それでは神様の愛はほんの一握りしかわからないことでしょう。私たちも視野が狭くなり、神様の愛が自分とその周りにしか及んでいないかのように錯覚してしまうことがあるかもしれません。あるいは、神様の愛はクリスチャンにだけ臨み、ノンクリスチャンは愛されていないと思いがちです。しかし、神様の愛の深さは、私たちが想像もできないほど深く、暖かなのです。このことをあらゆる経験を通して悟ることを主は望んでおられます。そのような愛で、私たちも愛されているのです。このような愛の大きさのゆえに私たちは永遠の命へと導かれ、このような愛の深さのゆえに、私たちは憐れみを待ち望むことができるのです。